

甲府と国分寺(東京都)における富士山の顕明度に関する調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々倉, 航三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006082

甲府と国分寺(東京都)における 富士山の顕明度に関する調査

佐々倉航三※

静岡市から見た富士山の顕明度と気候要素との関係について筆者はさきに静岡大学教育学部の研究報告(1)や、同大学地学研究グループの機関誌である本誌(2)にも報告したが、本年(昭和36年)出版された辻村太郎先生古稀記念論文集(3)には最終的な結論を出しておいた。しかしこれらは何れも総括的な気候学的に調査したものであって個々の南偏風と個々の顕明度との関係を1つ1つ詳細に吟味したものではなかったことが心残りであったが資料の制約上やむを得なかったのである。

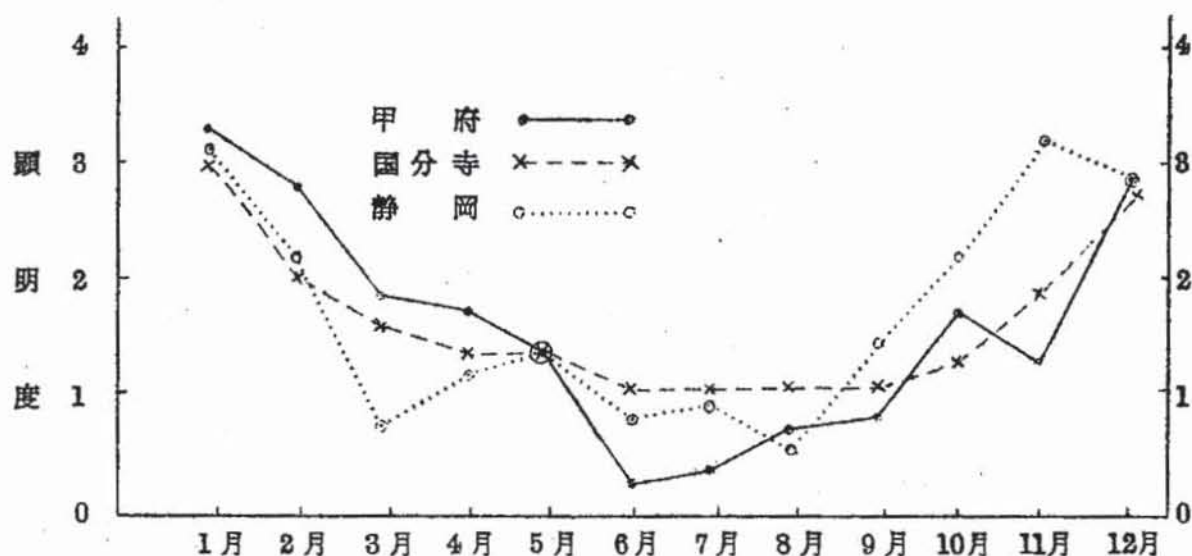
富士山の顕明度解り易くいえば富士山の遠望の良し悪しは特に外人観光客らに関心を持たれるものであるのはいうまでもないことであり、1昨年(昭和34年)の朝日新聞が“天声人語”でこのことについて触れたので、同年2月筆者は同新聞の“学界余滴”においてこれに答えておいたのであった。ところが筆者の記事が機縁となって、甲府在住の歌人倉田逸子さんと東京都国分寺在住の電気通信大学々生の乙津祐一さんとがそれぞれの在住地から筆者と同じ方法で富士山の顕明度を観測調査され、その貴重な資料を筆者の許へ寄託されたのであった。本文はこれら2氏の折角のご厚志に対しお応えする意味で綴ったものである。

まず甲府における倉田氏の調査から紹介しよう。観測期間は昭和34年6月から35年5月までの丸一年間である。その間の各月平均顕明度の年変化を示せば第一表及第一図のようである。

第 一 表

34年											35年					平均
6月	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5					
0.8	0.4	0.7	0.8	1.7	1.8	2.8	3.5	2.9	2.0	1.8	1.4	1.63				
夏 0.47			秋 1.27			冬 3.07			春 1.73							

第 一 図



次に国分寺における乙津氏の調査を紹介しよう。観測期間は昭和34年3月から35年2月までの丸一年間である。その間の各月平均顕明度の年変化を示せば第二表及第一図のようである。

第 二 表

34年 3月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	35年 1	2	平均
1.7	1.3	1.4	1.0	1.0	1.0	1.0	1.2	1.9	2.7	3.1	2.1	1.62
春 1.47			夏 1.0			秋 1.37			冬 2.63			

上記の甲府と国分寺の各月平均顕明度の年変化を見ると各月ごとの両者の平均顕明度には大きな差異はなく、従って両者の年変化の様相も酷似しているが特に年間の平均顕明度は甲府が1.68、国分寺が1.62であって殆んど等しいのは奇異な感じを受けるほどである。

静岡から見た筆者らの観測調査は昭和30年1～12月のものであり、各月の平均顕明度の年変化は第三表及第一図のようである。

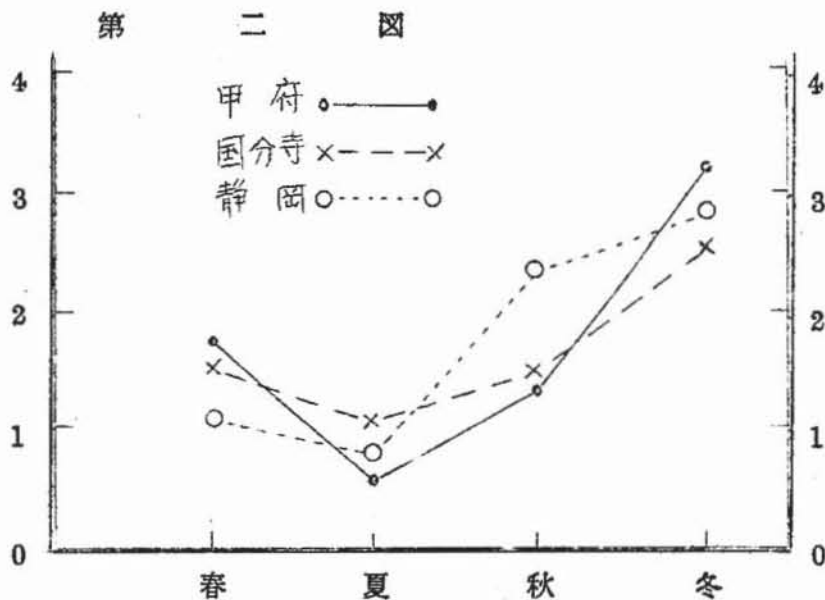
第 三 表

30年 1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
3.4	2.3	0.6	1.1	1.4	0.8	0.9	0.6	1.5	2.2	3.1	2.8	1.73
春 1.03			夏 0.77			秋 2.27			冬 2.83			

さて甲府での顕明度は冬春秋夏の順に下っているが、静岡での顕明度は冬秋春夏の順に下っている。冬が最も良く夏が最も悪いことは両者とも同じであり、かつ夏冬それぞれの数値にも大差はないが秋と春の関係は両者が逆になっており、静岡では秋（2.27）が春（1.03）よりも著しく良く、甲府では秋（1.87）が春（1.47）より幾分悪い。

また夏秋冬は甲府も国分寺もともに同じ期間（昭和36年6～8月，同年9～11月，同年12月と35年1～2月）の観測であるが、春だけは両地それぞれ異っており、甲府のは昭和35年3～5月の観測で国分寺のは昭和34年3～5月の観測である。しかし国分寺の顕明度も春と秋の差こそ小さいが冬春秋夏の順に下っていて甲府と同じような傾向を示している。

これら四季別にした顕明度の年変化の様相は第二図によって明かであろう。



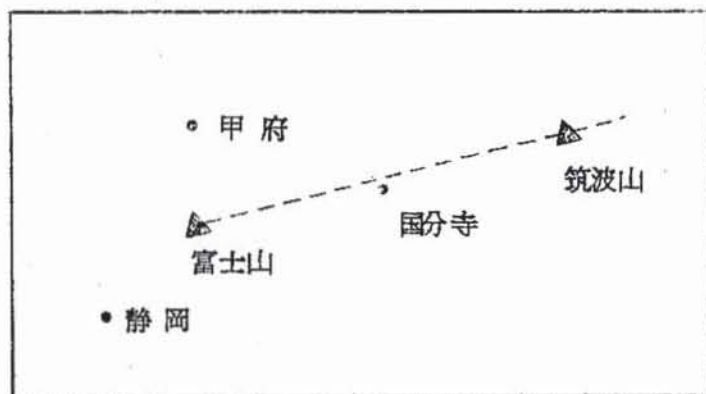
静岡の月平均顕明度の年変化と甲府、国分寺両地のそれとがこのように異なるのは(1)観測地点が異なるためか、(2)観測期間が異なるためか、または(1)(2)両者が組合さった結果であろう。

そこで次のようなことが考えられるのである。

- (1) 昭和30年の静岡の顕明度の年変化の順冬、秋、春、夏が静岡における正常なものなのか、または静岡においても甲府、国分寺における順と同じく冬、春、秋、夏が正常なものなのか。
- (2) 昭和34年3月乃至35年5月の甲府、国分寺の顕明度の年変化の順冬、春、秋、夏は甲府、国分寺における正常なものなのか、または甲府、国分寺においても静岡の順と同じく冬、秋、春、夏が正常なものなのか。

要するに静岡と甲府、国分寺の年変化の順は正常な年においては同じであるのか、もし同じであるならば冬、秋、春、夏の順が正常なのか、冬、春、秋、夏の順が正常なのか。あるいはまた正常な年においても両者は異っているものなのだろうかということになる。

第 三 図



先年畠山久尚氏(4)は筑波山から富士山が見える所謂異常透明の回数(5年間)の観測を調査したがその結果は第四表のようになっている。

第 四 表

1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
98	94	57	85	6	4	6	7	25	37	78	83
冬 270			秋 140			春 98			夏 17		

異常透明回数が多いほど一般に平均顕明度は高いといえるであろうから、筑波山のものは静岡における順と同じ傾向であるといえる。富士山、国分寺筑波山は概ね一直線上にあるから（第三図参照）特に国分寺附近に地方的気象状態の異常がないものならば、国分寺からの正常な顕明度の順は筑波山からの正常な顕明度と同じ傾向をもつべきであろう。従って今のところ甲府からの顕明度については何んとも断言できないが、少なくとも富士山の表側（山梨県側）以外からの顕明度の正順な年変化は冬，秋，春，夏の順と考えてよかろうと思われる。

甲府、国分寺での観測期間（昭和34～35年）中の気候状態はどうも平年とは幾分異っていたように考えられるのであり、倉田氏はその観測期間中の毎日の甲府の風向、風速、天気などの資料までも送って下さったが、顕明度との関係におけるこの点の疑問は簡単に解明し難くむしろ問題を残しておくことが妥当のように思われる。

終りに倉田、乙津両氏のご努力とご厚志に対し敬意と感謝を表する次第である。

参 考 文 献

- 1) 佐々倉航三・望月誠：静岡市から見た富士山の顕明度に就いて，静岡大学教育学部研究報告 8，P. 167～172，1957.
- 2) 佐々倉航三：静岡市から見た富士山の顕明度と南偏風との関係について地学しずはた 18，P. 1～2，1959.
- 3) 佐々倉航三：静岡市から見た富士山の顕明度と気候要素との関係について，辻村太郎先生古稀記念地理学論文集 P. 339～342，1961.
- 4) 畠山久尙：視程について，測候時報 3，P. 14～18，1932.